

マンスフィールドの“Brave Love”について

水田 圭子

マンスフィールド (1888-1923) のこの短編は夫 Murry が編集した、*The Journal of Katherine Mansfield*によると、1915年1月12日に完成している。その日はこう記されている。「…今日は、どちらかという和有徳の状態にあった。実際『ひたむきな愛』(“Brave Love”)という物語を終えた、そして今でもそれをどう考えてよいかわからない。J.に読ん¹⁾できかせた、彼も当惑していた。ひどい頭痛、でもとても幸福。」この引用中の『ひたむきな愛』について、Murry は「この物語は初めの数ページが残っているだけである。」という脚注をつけている。

しかし後になり次のことが明らかとなった。Mansfield の後半生の献身的友であった Miss Ida Baker (L.M.として知られている) が所持し、1950年代の初めに売られた二つの原稿があった。このうちの一つが『ひたむきな愛』であった。Baker 嬢のもとにはこの二つの原稿の写真複写が残され、解説される予定であったが、視力の問題から果たされなかった。一方マンスフィールドが生まれたニュージーランドのウェリントンにある国立参考図書館 The Alexander Turnbull Library の司書をしており、Mansfield の遺稿を解説し *The Turnbull Library Record* に発表している Margaret Scott 女史が Mansfield の手紙を集め編集しているときに Miss Baker に会い先の原稿の解説を頼まれた。二つの写真複写は、現在同図書館所有となっている。

解説の結果 “Brave Love” は完全な作品であることがわかり、先の雑誌の編集長でもある図書館長の許可をえてニュージーランドの文芸雑誌 *Landfall* 101 (Vol.26, No.1, March 1972, pp. 3-29) に発表された。

なお解読難解のため不確実な語には星印がつけられ全体で五つある。また七章の最後には解読できない文が二行ある。現在、上記の雑誌に発表された“Brave Love”は*The Complete Stories of Katherine Mansfield* (Auckland: Golden Press, 1974) (New Zealand Classics Giant)の最後にも収められている。

さて以上がこの作品についての紹介であるが、この小エッセイでは、色彩を中心として、この作品を検討したい。

全九章からなるこの物語の簡単な内容は、船員である若者ミトカ(Mitka)はロンドンの兄(Paddy)の家へ五日間の休暇を過しにくる。その家に同居するヴァレリ(Valerie)を、彼は彼女に愛する男がいるにもかかわらず、勇敢にも愛してしまう。ヴァレリも若々しいミトカに半ば心ひかれるが、結局はミトカの懸命に愛する気持は報われない。兄の家には兄の妻ミルドレッド(Mildred)と彼女の母ファーマー夫人(Mrs. Farmer), フォスター老中佐(old Colonel Foster), Mildredの二人の息子達、南アメリカ人(South Americans)が他に同居している。この物語はミトカの勇気あるひたむきな恋をほめたたえと共に、彼が体现する無邪気(innocence)というものは、いかに美しくまた、これらの世慣れた人々に接して、いかにもろく滅びやすいものかを描いている。

この作品は夏を背景としているためか色彩が豊かであるという印象を受ける。全体を通して、使われている色彩と出現度数は以下の様である。
 ‘white’(15, whiteness〔1〕も含める), ‘black’(11), ‘dark’(6), ‘yellow’(5), ‘pink’(5), ‘blue’(4), ‘red’(4), ‘grey’(3), ‘pink and white’(2), ‘silver’(2), ‘gold’(2), ‘brown’(2), ‘black and white’(1), ‘red and white’(1), ‘purple’(1), ‘purplish’(1), ‘dark red’(1), ‘milky’(1), ‘red and grey’(1), ‘pale’(1), ‘green’(1), 光と色彩

もかねて‘bright’ (2)。以上22種類、72語である。

マンスフィールドにおける色彩の使われ方は、単に色としての役割の場合、または、象徴的な意味をもつ場合、または色彩に光が加わってさらに象徴的意味を強め、全体の雰囲気や美的効果を高めたりする場合等に分けられる。このエッセイでは主としてピンク色、黄色をみて行きたい。その前に先にあげた色彩出現度数の高い上位三つを簡単にみることにする。

‘white’ はマンスフィールドにとり重要な色であろう。この作品では無邪気さをあらわしたり、「白い光」、すなわち月光のもとでの夢想（第一章第一節）、外では太陽が輝くとき「白い部屋」での夢想（第七章の最後の節）等にみられる静かな花やかさ、夢のような遠い非現実的雰囲気をあらわす。（短編“Miss Brill”では、白は悲しみをあらわす色として使われている。）‘black’ は「不気嫌な気分」（‘my black monkey’）²⁾ という象徴的な言い方以外では、ヴァレリ、パディの髪の色、残りは服や装身具、持ち物に使われている。黒はしゃれた色であり、先にあげたウェリントンのアレグザンダー・ターンブル・ライブラリィには、マンスフィールドの遺品が保存されていて、その中に、黒い日本の扇や、黒い絹地に花鳥の刺しゅうのある中国のショールがある。黒はマンスフィールドの好みの色なのでであろう。（短編“Bliss”では「灰色の猫」とその後について行く「黒い猫」たちのすばやい行動には、明らかに象徴的意味がある。）‘dark’ は、ミルドレッドの二人の息子たち、two South Americans と花売り男の皮膚の色である。またミトカがヴァレリに別れを告げに行った部屋はブラインドが下ろされていたので、‘dark’ とされ、ミトカの髪の毛もこの色である。‘dark’ は‘black’ に比べて物や色が識別できるので神秘的な感じがあり、あるいは未知なるものの転回が予測される。ミトカはその部屋でついに Valerie に愛の告白をしてしまう。二人の息子たちは笑い声をたてたり新聞を声を出して読んだりするが具体的

会話は一つもなく神秘的な存在である。花売りもヴァレリの夢現に現われただけで、不思議な存在のままである。

このエッセイでは色彩としての印象の強い、ピンク色、黄色について主としてみて行きたい。

さてピンク色であるが、ピンクと他の色の組み合わせの外、ピンク色を連想させる物も含めたい。ピンク色が現われる所をみると、ロンドンの町の数軒の家のバルコニーに広げられた日よけ（‘awnings’³⁾）がピンクと白である。ミトカが訪れる兄パディの家の客間もピンクと白である。以上は第一章であるが、第五章では、ミルドレッドの母が、意気消沈するミトカをみて、「彼は恋をしているのです。」⁴⁾と指摘するが、それと同時にカスタードを自分の黒い絹のボディスにこぼしてしまう。それをみてミルドレッドは「あなたはまたご自身をどんなにきたなくしているかご覧なさい。」⁴⁾というが、このとき、‘a piggy mess’という言葉が使われ、‘piggy’は子豚あるいは赤ちゃんのようによごしながら食べることを連想させる。また子豚や赤ん坊の色はピンク色である。今の場面は午餐であるが、このあとでミトカはヴァレリに誘われて散歩に出るが、ヴァレリはピンク色の日がさで影を作る。次に七章では、ヴァレリは、病気のミトカからマルセイユの彼のもとへ来てほしいという手紙を読み、本当に行くつもりはなかったが、マルセイユの部屋を想像してみる。彼女は白い部屋にいて海まで続くピンク色のつやのある花々が咲く庭を眺め渡している。「ミトカは彼女と一緒にいた、彼は目を閉じて仰向けに寝ており、大変紅潮して、耳も唇もとてもピンク色であった。」⁵⁾とある。

前節のピンク色のつやのある花々（‘pink waxy flowers’）とは、マンズフィールドの生まれ故郷ニュージーランドにあまた群生して咲くマツバギク（*Mesembryanthemum*）を連想させる。南アフリカ原産で多肉質で地中海沿岸にもみられるという。太陽に向かっていっせいにぱっと花卉をひろげて咲く様は、元気はつらつとして水々しい。ヴァレリの夢現の中

でその色がミトカに移り、ミトカも若々しさの絶頂にある。この花は最初 *Mesembrianthemum*（ギリシア語の意味は真昼の花）であったが、夜開花する種が発見され、*i* が *y* に変えられ意味も変えられたということがあるが、ここでは晴天の太陽のもとに咲き日が陰ると閉じる種類のものを考えている。従って光と色彩が十分生かされているといえる。

ヴァレリはミトカを「小さな赤ちゃん」（‘*les petits bébés*’）⁷⁾の仲間⁸⁾に考えたり、「あどけない口」（‘*a baby mouth*’）と赤ちゃんに関連させている。兄もミトカを「…あなたは戦場の裸の赤ん坊のようです。」⁹⁾と、ミトカが自分を防御するものをもたないことをたとえていう。ミルドレッドも「事態が破壊されるのを聞くのはいやなのです——それに赤ちゃんは豚よりもひどく泣きます。…」とミトカがヴァレリに破滅させられることを遠まわしに言っている。赤ん坊からの連想はミトカが若く未経験で孤独で純粋無垢な青年ということである。フレッシュを連想させるピンク色はそうした世界をあらわす色である。また *Flowers and Their Histories* によると、色彩としてのピンクは花 (*the Pink*) の色に由来しており、「それはかなり最近の言葉で、18世紀末以前にはめったに使われなかった。」¹¹⁾とある。色彩としてのピンクは大変新鮮みがある言葉といえる。

他の人物におけるピンク色の関係をみると、ミルドレッドの母は体の自由がきかないためいす車で散歩にでるが、それをバルコニーからみたヴァレリはそばのミトカに「赤ちゃんに手を振りなさい。」¹²⁾と言う。ヴァレリは、わざと「散歩に行く」を‘*going tata*’ と幼児語を使う。しかしミトカの場合と違って、ピンク色の連想はうすい。何故なら、ファーマー老夫人の性格はとても頑固で、都合が悪くなると‘*Wait*’という言葉を使って逃げる。自分の存在の重要性をひろうするかのように突然金切り声をあげて発言し、ミトカを不快にしミルドレッドを困らせる。

ヴァレリは表面 *innocent* にみえる。ミルドレッドはヴァレリの寝顔を

見ながら「ヴァレリがどのようにあるいはなぜ外観の子供らしさを保つ
 ているのかしら¹³⁾」と思う。また間接内的話法で「そう彼女は美しい！とミ
 ルドレッドは考えた。おやおや彼女は何て無邪気にみえるのでしょ
 う。彼女は全く情熱的な小悪魔なのであろう。」¹³⁾と述べる。さらにヴァレリの
 部屋がちらかっているが、「この乱雑さ⁸⁾」も魅力の一面なのだと述べた
 あと、彼女はヴァレリを「この小さな生意気な娘」(‘this little minx’⁸⁾)
 と考える。minxは、一人前の大人のような考えをもつ生意気な子供であ
 る。ヴァレリの行動には無責任なところがあり、その点彼女は子供であ
 る。ヴァレリは半ば **innocent** で、それゆえ純粹無垢なミトカにひかれるが
 決断する勇気がなく、物質主義的で、世ずれした有閑階級の人々との生活を抜
 け出すことができない。ミトカに比べて、ヴァレリは **innocence** が半ば
 なくなり、利己的である。病気のミトカを見捨ててエヴァシェッドを選
 んだが、果たして本当にエヴァシェッドを愛しているかどうか疑わしい。

次に黄色であるが、*Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*に
 よると黄色は、嫉妬、移り気、不義、裏切り、臆病を象徴するとある。
 また辞書によれば、原色の一つで最も明るい色、あるいは老齢や病気によ
 り黄色い場合、又、枯葉、熟した麦や、古びた紙の色などの場合がある。
 しかし **yellow beak** は **young birds** をほのめかし、未経験者、初心者
 のことを言う。『花ことば』（引田茂著、保育社カラーブックス、pp. 116
 -117）によると「花の色についても各国でちがっています。黄色は、ロ
 ーマ帝政時代まで愛好、尊重されましたが、キリスト教の勃興による教
 門の争いから、旧宗教に属するものを絶えさせようとして、今まで尊重
 していた黄色に対する憧れを最も下劣なものとし、これにかえて青
 色を最高の栄誉あるものとししました。それで西洋では黄を不吉な色とし
 て黄昏、頹廢、病気、死、嫉妬などを連想し、黄色のエニシダはあまり
 観賞しませんが、中国では貴重な色として崇拝しますし、日本のフクジ
 ュソウは…長寿と幸福のシンボルとされています。…最近では、黄色は

セーフティ・カラーとして安全を示すのに利用されるようになりました。このように色に対するシンボルも時代とともに移り変わっていくことでしょう。」とある。

ニュージーランドの国花コーワイ (Kowhai) も春に黄色い花を咲かせる木である。さて、“Brave Love”において黄色が現われる箇所をみたい。まず、ミトカが兄の家を訪れた晩、皆に紹介されるが、そのとき、ファーマー老夫人は「彼が彼女のちっちゃな黄色い手の上に身をかかめたとき、彼女はやつれ、震えているようにみえた¹⁴⁾」と描かれている。この黄色は老齢によると思われる。

次にパティ、ミトカ、ミルドレッド、ヴァレリの四人が田舎へドライブに出た日、行った先でお茶のあと、ヴァレリとミトカが二人で散歩をする。ひいらぎにふちどられた芝生地の一隅に黄色い花でおおわれた木がある。二人はその下へ坐る。ミトカは彼女のことを知りたいので、あまたの話をきかせてくれるように頼む。彼女に「後悔するでしょう¹⁵⁾」といわれても彼はそんなことはないと言う。「話すことなど何もないのよ、ミトカ¹⁵⁾」と彼女は言う。「彼女が彼の名前を言ったとき彼の胸はどしんと音がした。『初めてあなたが私を名前で呼んだのはこの木の下です。』¹⁵⁾」と言って彼はこの黄色い驚異の輝かしい枝をじっと見上げた。」とある。この場合の黄色はミトカの幸福感を象徴している。また花ということはミトカの innocent な美しい心もあらわしている。

この黄色には輝かしい (‘bright’) という光をあらわす言葉が使われている。[b]音の頭韻の効果もあるが、彼の内面の幸福感をあらわすのに単に色彩だけでなく光が加わっている点マンズフィールドの特徴である。これは彼女の後の作品 “Bliss” (1918) の女主人公 Bertha が見上げる至福の象徴としての月光をあびた梨の花咲く木に通じる。

次に七章で黄色は「傷のついた黄色いバラの大きな花束 (‘a big bunch of bruised yellow roses’)⁸⁾」として使われ、それはヴァレリの化粧テー

ブルの上にある。ここでも〔b〕音の頭韻がみられる。ミトカが去った数週間後のある朝、ミルドレッドがヴァレリアての一通の手紙を渡しにきたとき、まだ眠っているヴァレリアの部屋を見渡しているときの描写である。この黄色い花束は恐らく前夜、ヴァレリアとエヴァシェッドがクラブへ出かけて朝四時に帰るが、そのときのエヴァシェッドの贈り物か何かであろう。黄バラは傷むとすぐ茶色の筋がはいり、痛ましくみえる。黄色いバラの花言葉は、友情のうすらぎ、嫉妬などよくない。それは別としても、愛や美の象徴として咲き誇るバラ、また先の「黄色い驚異の輝かしい枝」と比べて、特に傷ついた黄色いバラとあると、ミトカの幸福もつかの間と感じさせる。それは“Bliss”の主題とも同じである。また彼のもつ美しい innocent な世界も同時に傷つきやすく崩壊してしまうかもしれないことが暗示される。

最後に黄色い色はマルセイユのミトカの泊まっている部屋のベッドの掛けぶとんである。彼の屋根裏部屋の「一方の隅には、黄色い花の模様のついた赤い掛けぶとんにおおわれたベッドが一つあった¹⁶⁾」とある。黄色い花は生きた花ではなく、永遠に傷つくことがない幸福の花として絵柄化されている。背景の赤は、愛の殉教者としてのミトカの血を象徴するかのようである。

前節の部分は八章にあたるが、この章は色彩と光と音の総合的効果に基づく美しい章である。そこには地の文と間接内的話法が入りまじっている。この章はミトカのひたむきの愛への賛歌の章ともいえる。あるいは、死んでしまうかもしれないミトカのため、彼の innocent な世界の崩壊とその美しさを描いて償いとしているともいえる。ミトカはヴァレリアのことを最後まで愛し続け手紙を待っていたのである。ついに手紙がやってきて、それを受け取り部屋にはいり、ドアにもたれ、鏡の中の自分を見た。「非常に変貌しており、非常に神秘的に喜びにあふれていた。ミトカは死んだと彼は考えた。ミトカは聖者である¹⁶⁾」そして手紙のことは忘

れる。彼は手紙を超越したのである。そして精神的に再生したのである。これは、彼の部屋を美しくする太陽光線が彼の再生を促したのである。

ここで色彩と光と音の経過をみたい。彼のベッドのそばのたなの上にあらゆる色のピンがある。それらに輝く太陽の光束がピンをさらに美しくさせる。「使い古されたブラインドからもれる太陽光線は床や壁の上に光線となったり、金色の光の大きな柔らかい輪となって輝いていた」¹⁶⁾

古来太陽はすべての物に生命やよみがえりを与える。ミトカは微笑し、テーブルの方へ行き、そこへ坐る。彼は手紙でテーブルを叩く。彼は夢心地になる。ブラインドが上がり、そよ風にあわせてブラインドも軽く叩く。窓の外から‘AAai’¹⁷⁾と‘EEEEEE’¹⁷⁾という長く引く叫び声がきこえてきて、彼は子供時代を思い出す。前者に蜂の出す音と後者にそれを追いかける彼らの年とった庭師の出す音を連想する。彼は真に **innocent** な時代を思い出し、心静かになり再び海の上にいるような気分になる。

太陽の光の輪と美しいピンのある彼の小さな部屋は海に浮かび、外の声は水夫たちの声であると思う。色、光、音が調和し、ミトカの心と一体となり、**innocent** な世界の美しさは高まる。彼はようやく眠れるようになり、震える光の輪をふまないようにしてベッドへたどりつき横になり、意識を失ったように眠る。このあとは例の声も弱くなり、「太陽がヴァレリの手紙の上でゆらゆら動いていた」¹⁸⁾とある。ここは、舞台の上でスポットライトがヴァレリの手紙の上にあたり場面の転回を暗示するかのようである。この太陽の光は、ミトカによりヴァレリに与えられた再生の力のようである。ヴァレリは結局はエヴァシェッドと一緒にすることができるのだから、ミトカは彼女を救ったのである。

このあとヴァレリがミトカを訪ねてくる。ミトカがベッドに横たわっているので彼女は急いで走って行くが、彼は死んでいるのではなく、熟睡しているのだった。「顔は玉なす汗におおわれ仰げに眠っており、彼の唇と耳はとてもピンク色であった」¹⁸⁾とある。ヴァレリには理解できな

かったかもしれないが、このときのピンク色はまさしく the pink of elegance (優雅のきわみ) といったときの pink の意味がふさわしいであろう。彼の精神的再生により、innocenceの美のきわみをあらわしていると言うべきであろう。

ヴァレリがたずさえてきたのは白いカーネーションであるが、カーネーションの学名は *Dianthus caryophyllus* である。Dianthus は Di (ゼウスあるいはユーピテル) と anthos (花) より「神の花」の意味がある。『ギリシア・ローマ神話辞典』(高津春繁著、岩波書店)によれば、ゼウスの名前の語源は「天」、「昼」、「光」を意味するという。心配に眠れず苦行僧のような経験をした後、再生したミトカには神と光を合わせもつカーネーションはふさわしい花である。また先の *Flowers and Their Histories* の *Dianthus caryophyllus* の冒頭に John Parkinson (1567-1650) の *Paradisi in Sole, Paradisus Terrestris* (1629) からの引用がのせられている。「しかし喜びと花の女王であるカーネーションとじゃこうなでここには何と言おうか、その勇氣、多様さ、甘い香りが共に結びつくと、あらゆる人にそれらの花を好み所有したい熱心な気持ちを起こさせる¹⁹⁾」(傍線は筆者)とある。カーネーションが他の花にぬきんでて堂々と勇敢に咲く有様はひたむきにヴァレリを愛したミトカにささげられるのにふさわしい。またシェイクスピアではカーネーションは夏の花であり、この作品の季節とよく合っている。

前節の勇氣 (bravery) にちなんでミトカの勇氣ある行為をもう一つ付け加える。五章でヴァレリとミトカが暑い日差しの中を一緒に公園へ散歩に出た折のことである。太陽がヴァレリに暑く照るので、彼女は疲れる、それをみてミトカは、「非常に大きな巨人のような自分が、太陽がヴァレリに暑く照るので、空からそれを引き出して、こなごなに打ち砕く幻を突然みた²⁰⁾」とある。この部分は、マンズフィールドの生まれ

たニュージーランドのマオリ (Maori) 族の有名な神話を思い出させる。*A History of New Zealand* (ed. Keith Sinclair, Penguin Books, 1976, p.12) によると、マオリのアダムというべき英雄マウイ (Maui) は、太陽 (Ra) が早く動きすぎると考え、兄弟と共に太陽をわなで捕えて、おさえこんだところをマウイは、彼の祖母のあご骨で打ちすえた。その結果太陽は傷つき痛むので、その後常に空をゆっくり動かねばならなかった。

ミトカの行為は強い勇気ある英雄のそれに似たものであろう。しかし、白いカーネーションの「白」があらわす夢の遠い世界ゆえにか、カーネーションはヴァレリにより、持ち去られてしまう。innocenceの世界は滅んでしまうかもしれないが、色彩と光を駆使することによりマンスフィールドはinnocenceに最大の賛辞を与えたのではないか。

このような“Brave Love”にみられる色彩とその象徴、花の使用はシェイクスピアのエコーともいえよう。マンスフィールドの墓碑銘は、*King Henry the Fourth, Act II, Sc.iii, ll.10-11* ‘... but I tell you, my lord fool, out of this nettle, danger, we pluck this flower, safety.’ (しかし、いいか、愚か者、危険というこのいらくさから、安全という花を摘むのだ。)である。この部分と、七章のヴァレリの言葉‘...It’s¹⁰⁾ my one principle—snatched from a weary world—’ (それは私の一つの主義で——退屈な世界からすばやくつかんだものです——)は似ているように感じられる。

また一方光を重んじ室内の明りの場合を除き‘moonlight’を加えると‘light’は七回使われている。1910年11月8日から翌年1月15日まで「マネと後期印象派展」がロンドンで開かれたので、マンスフィールドもそれをみており、光を重んじる印象派の影響がないとはいえない。いずれにしろ、ミトカがヴァレリの美しさを指の一本一本より輝き出る光としてとらえるような捕え方は、根本的にはマンスフィールドの詩的精神に

よるもので、それがマンズフィールドの世界の重要な構成要素の一つといえる。

最後にこの作品が長い間発表されなかったのは、冒頭の日記にもあるように、十分満足いく出来かどうかははっきりしなかったためであろう。あるいはこの作品を書いたあと、1915年2月にマンズフィールドの弟レズリー (Leslie) がニュージーランドのイギリス軍に加わり、戦場へ行くまえの訓練のため英国を訪れる。やがてベルギーの前戦について一週間後、兵士たちを指導中、手榴弾が手の中で爆発し不慮の死をとげる。²¹⁾ これはマンズフィールドにとり大変な衝撃であった。ミトカの innocence の世界の崩壊、やがて死ぬかもしれない情況は結果的には弟の死を予言したような形になり、マンズフィールドはこの作品を発表したくなかったのかもしれない。

弟を連想したのは別の作品、未完の劇 “Toots” の中ででてくる Pip に通じる要素が Mitka の中にあるからである。“Toots” の製作年代ははっきりしていないが、1917年の春から1918年1月6日までの間に書かれたのであろうという説がある。²²⁾ *The Turnbull Library Record* (Vol. 4, No. 1, May 1971, p. 5) で Margaret Scott 女史がのべているように、Pip はマンズフィールドの弟レズリーをモデルとし若者として描かれている。この未完の劇はウェリントンのマンズフィールドと彼女の弟を中心とした両親一家を描いている。家庭風景を描いている点は一部 “Brave Love” と似ている。この一家の名前は Brandon であり、“Brave Love” では Valerie の姓が同名である。“Toots” の第一幕には a Southern American が娘婿として登場し、“Brave Love” の Mildred の息子たちは国はちがうが South Americans である。第二幕の Mr. Brandon はお腹に両手を組んでソファーに眠っており、“Brave Love” の Colonel Foster を思わせる。

さて“Toots”のPipは母親に髪の毛が新鮮なパイナップルのような匂いがするといわれてとても幸福な気分になる。前節Scott女史もそして注22)の論文にも指摘されているように、幸福な気持を出してしまわないと死にそうだというセリフは“Bliss”のBerthaに反映している。その続きのセリフに、それと同時にまるで何でもできるような気分を感じて、飛んだり一山を打ち倒したりどんな途方もないこともできるように感じるとあり、自分は巨人のようだというセリフがある。これは先に例にあげたMitkaが太陽をくたくイメージに似ている。

これも結果的なことであるが、1915年の秋にとった軍服の弟の写真の顔にはりりしい口ひげがあり、この点もミトカと似ている。マンズフィールド自身、Murryに失望し、1915年2月にはFrancis Carcoを訪ねてパリへ行ったりしたので、ヴァレリの行動を思わせるところがある。1914年の冬あたりの実生活がこの作品に反映したかもしれない。Valerie Brandonのそれぞれの最初の発音はマンズフィールドが好む〔b〕音やそれに近い〔v〕音を重ねて工夫をこらしているので無雑作に扱われていない（〔b〕音はBeauchampにちなんでいるという。）²³⁾何か作品を書くことにより自分の生きる方法を模索していたのかもしれない。そのため、“Bliss”などに比べ少し精彩に欠けるかもしれない。しかし“Bliss”へ行くまでの一つの試作であろう。“Brave Love”の人たちが“Toots”の登場人物へ変化したのであろう。PipとBerthaはすでに指摘されているが、それにMitkaを加えて一連の線上で考えることができるであろう。ミトカが九章で部屋ごと海に浮かんでいると考えるが、“Bliss”でも光の種類は違うが、ガラスのお皿や鉢が空中に浮かんでいるという所がある。ミトカは神は愚かであると考えますが、“Bliss”では神の代りに文明が使われている。またミトカの自己防御のための孤独は後の“Miss Brill”に描かれる孤独(loneliness)を思い出させる。“Brave Love”は“Maata”²⁴⁾(1913年に書き始められた作品の一部)の書き出しとちょっと似て

いるところもある。“Brave Love”はこの作品の前後にくる作品と結び合っており、後に発展するテーマも含まれ、弟の死によりニュージーランドの子供時代をテーマとしたものに力をいれる1915年の転換期の作品としていろいろな要素を含んだ作品である。

Notes

- 1) J. Middleton Murry, *The Journal of Katherine Mansfield, 1904-1922, definitive edition* (London: Constable, 1962), pp. 67-68.
- 2) *The Complete Stories of Katherine Mansfield* (Auckland: Golden Press, 1974) (New Zealand Classics Giant), p. 829. (以下*Complete Stories*と略す。)
- 3) *Ibid.*, p. 797.
- 4) *Ibid.*, p. 816.
- 5) *Ibid.*, p. 826.
- 6) 山田晴美編、『園芸植物学名辞典』、農業図書、pp. 206-207.
- 7) *Complete Stories*, p. 810.
- 8) *Ibid.*, p. 824.
- 9) *Ibid.*, p. 815.
- 10) *Ibid.*, p. 825.
- 11) Alice M. Coats, *Flowers and Their Histories* (London, E.C.4: Hulton Press, 1956), p. 77. (以下 Coatsと略す。)
- 12) *Complete Stories*, p. 807.
- 13) *Ibid.*, p. 823.
- 14) *Ibid.*, p. 799.
- 15) *Ibid.*, p. 812.
- 16) *Ibid.*, p. 827.
- 17) *Ibid.*, pp. 827-828.
- 18) *Ibid.*, p. 828.
- 19) Coats, p. 71.
- 20) *Complete Stories*, pp. 818-819.
- 21) Jeffrey Meyers, *Katherine Mansfield: A Biography* (London: Hamish Hamilton, 1978), p. 120. (以下 Meyersと略す。)
- 22) Christiane Mortelner, “Un Inédit de Katherine Mansfield *Toots*, Pièce Inédite Inachevée”, *Études Anglaises* (T. XXVI, No. 4, Oct.-Déc. 1973), pp. 402-403.
- 23) Meyers, p. 119.
- 24) Margaret Scott, “The Unpublished Manuscripts of Katherine Mansfield”, *The Turnbull Library Record* (Vol. 7, No. 1, May 1974), p. 4.